

テーマタイトル：スリランカの産業と社会構造 — 発展と課題を現地研修から考える

経済学部・産業社会学科・3年・230322014

榎本滝桜

【はじめに】

私は、大学の海外研修プログラムの一環としてスリランカを一週間訪れ、現地の産業や社会を視察する機会を得た。研修では、まずは2大学（スリジャヤワルダナプラ大学、LNBTI大学）にてSDGsテーマの英語のプレゼンテーションを2回実施し、その後アパレル工場や港湾施設、茶園、さらに輸出加工区（工業団地）を実際に見学し、現場の労働環境や生産工程、インフラ整備の様子を直接体験した。この短期間の滞在を通じて、スリランカの産業構造は「農業依存の国」という従来のイメージを超え、製造業や港湾を軸とした多角的な発展段階にあることを強く感じた。特に、女性労働力を大量に吸収するアパレル産業や、国際物流の要衝として機能する港湾、さらに環境配慮を進めながら輸出志向型の産業集積を形成する工業団地は、今後のスリランカ経済を考えるうえで不可欠な視点を与えてくれる。また、仏教文化に基づく祈りや自然との共生の姿勢が、人々の暮らしや労働観に深く根付いていることも印象的であった。同時に、政治的な不安定さや貧富差の拡大といった課題も垣間見えた。本レポートでは、①主要産業と生産現場、②文化・宗教と人々の暮らし、③社会構造と今後の課題の三つの観点から、スリランカ研修で得られた知見を整理する。

【主要産業と生産現場】

スリランカの主要産業は大きく製造業・農業・港湾に分けられ、それぞれが国内経済と国際貿易を支える役割を果たしている。製造業の代表例としては、アパレル産業が挙げられる。特に MAS INTIMATES は、国際的下着ブランド向けに生産を行う世界的規模のサプライヤーであり、スリランカを代表する輸出産業の一翼を担っている。同社の工場では約1500人規模の労働者が二交代制で勤務し、勤務開始時には国歌を斉唱するという独自の慣習が存在する。ブランドごとに輸入された生地はまず工場内で耐久性テストを受け、その後裁断・縫製・仕上げへと進む。縫製ラインは55チーム×25人で構成され、技能を三つ習得した作業者がチームリーダーを務め、さらに5チームをまとめるグループリーダー制度が導入されており、生産の効率化と技能の蓄積を同時に実現している。ここからは、スリランカが単なる安価な労働力供給国ではなく、人材育成を重視する生産拠点へと変わりつつある姿が見て取れた。

一方で、港湾産業は国際物流の要として発展してきた。シティポートは政府と民間企業が35年契約で協力運営を行い、契約終了後には国に返還される仕組みを採用している。潮位差が1メートルと小さい地理的条件は効率的な港湾運営を可能にし、2013年以降はアジア開発銀行の出資によって埋立地や新港湾設備の整備が進められた。さらに、自動化設備の導入により、世界的なコンテナ中継港として大型船から小型船への積み替えや冷凍貨物への

電源供給など、高度な物流拠点としての機能を担っている。これは、スリランカがインド洋の立地を活かして国際貿易の中継地として存在感を高めていることを示している。

農業分野においては、茶葉産業が特に有名である。ゴール地方の茶園では1935年創業の農園が現在も100品種を栽培しており、自然栽培やオーガニック製法が積極的に取り入れられている。収穫は主に柔らかい新芽を手摘みすることで品質を確保し、乾燥・手揉み・発酵・選別といった工程を通して商品化される。この工程も実際に見学させていただいたが、とても細かい作業が特徴だった。一つの工程を見ても、茶葉に込められた思いが伝わるようなクオリティだった。また、栽培地の高度や気候によって味が大きく変化する点も特徴であり、低地の茶葉は濃い味わい、高地の茶葉はマイルドな風味を持つとされる。特にホワイトティーは希少性が高く、西洋市場で強い需要を持つ。更には、同じブラックティーとされる茶葉を、アルファベットで品質分けを行っており、茶葉の奥深さを知る機会となった。ここには、スリランカが量より質を重視して国際市場で評価を高める工夫が感じられた。

さらに近年では、1991年に設立されたエクスポートゾーン（工業団地）が新たな産業拠点として注目されている。ここには25社が進出しており、繊維関連企業が10社、電気・半導体関連企業が15社を占める。郊外から集まった約2万人の労働者が働いており、そのうち1万6000人は女性である。このため、工業団地内には育児支援や医療施設、祈祷スペース、ジムといった生活支援インフラが整備されている点が特徴的である。また、環境面にも配慮し、上水処理施設を整備して毎日2500トンの浄化水を海に排出している。こうした取り組みは、経済成長と同時に社会や環境への責任も果たそうとする姿勢を示している。

以上のように、スリランカでは伝統的な農業や茶葉輸出、国際的な港湾物流に加え、工業団地を中心とする製造業の集積が進んでいる。経済学部学生の視点から見ると、これらの産業はそれぞれ「人材育成」「地理的条件の活用」「品質戦略」「社会や環境への配慮」といった工夫を持っており、スリランカが農業依存から抜け出し、多様な産業を育てようとしていることがよくわかる。今回の研修を通して、産業発展は単に経済成長の数字だけでなく、人や社会の暮らし方を大きく変える力を持っていることを実感した。

【文化・宗教と人々の暮らし】

スリランカの生活に深く根付いているのは仏教文化である。修道院は地域社会の精神的支柱として大きな役割を果たしており、その建設時には髪の毛を基礎部分に埋める慣習があることを知った。これは、人々が自らの身体の一部を捧げることで寺院との結びつきを強める象徴的な行為だといえる。多くの人々が一日を通して参拝を行い、白服を着て寺院を訪れる姿が印象的であった。また、菩提樹への信仰も篤く、樹木に花を供える場面や、サルの花を釈迦への供物として捧げる場面も見られた。更には、街中にたくさんの仏像が存在しており、夜になるとその仏壇が光り輝いていた。こうした信仰は日常生活にも自然に組み込まれており、安全祈願や試験合格祈願など、個人の生活に密接に結びついている点は、日本の宗教観と比較しても大きな特徴だと感じた。街並みや生活様式からも、文化の独自性を垣間見ることができた。家屋は風通しを重視して設計され、白い外壁の住宅が多く見られた。

都市部では、一階を店舗、二階を倉庫として活用する二階建て商店をよく見かけた。公共施設にはイタリアやローマ風の建築様式が取り入れられていた。また、公園は24時間開放されており、治安の良さを感じさせる一方で、日曜日には街全体が静まり返り、宗教や家族と過ごす時間を大切にする国民性を感じ取った。

さらに、自然との共生はスリランカの暮らしを理解するうえで欠かせない視点である。例えば茶園では、茶葉を守るために「影樹」と呼ばれるグリセリアが植えられ、その落ち葉が肥料として再利用されていた。また、害虫対策には化学薬品ではなくシュトロレラなどの植物を活用しており、持続可能な農業が実践されていた。経済学部の学生として考えると、こうした慣行は環境コストを抑えるだけでなく、「エコ・ブランド」として国際市場での競争力を高める要素にもなり得ると感じた。つまり、文化や信仰に根ざした暮らし方や自然との共生の姿勢が、結果的に経済的な価値を生み出している点にとっても興味をもった。

【社会構造と今後の課題】

スリランカの社会を見ると、経済的・政治的な背景が生活や産業に大きく影響していることがわかる。貧富の差や都市と地方の格差は依然として大きく、街中を歩くと家を持たずに生活している人や、日々の生計を個人経営の小さな店で立てる人が多く見られた。日本のように会社に就職することが当たり前ではなく、人々は自分の技能や工夫を活かして生活の糧を得ている。このように、正式な会社や公的な制度に頼らずに行われる小規模な仕事や商売のことを、経済学では「非公式経済」と呼ぶ。街の観察から、スリランカではこの非公式経済が人々の暮らしや都市の活気を支える大きな役割を果たしていることを実感した。

また、安全や制度面では、都市部のショッピングモールでの所持品検査や港湾・工業団地での厳格な国際物流管理が、経済活動の信頼性を支えていることも確認できた。教育面では、都市部に大学が集中し、MBAなど高度な資格の価値が高いことから、人的資本への投資が経済発展に直結していることがわかる。加えて、街中で見かけた日常的な商売や市場のやり取りを観察して、経済活動は必ずしも正式な仕組みに依存せず、人々の生活力や工夫によって支えられていることを改めて感じた。これらは、経済格差や地域格差を背景に、非公式経済が社会の柔軟な安全網として機能している一面でもあり、経済学部の学生としては、統計や理論だけでなく現場を観察する重要性を実感させられた。こうした視点は、スリランカの産業発展や社会政策を考えるうえで欠かせない示唆を与えてくれた。

【結論】

スリランカでの一週間の研修を通して、経済活動と人々の暮らしが深くつながっていることを肌で感じた。MAS INTIMATESの工場では、単に人手を集めるだけでなく、技能習得やリーダー制度で人材育成を重視している様子が印象的だった。港湾や茶園でも、地理や自然環境を活かした工夫が随所に見られ、国際市場で価値を高める戦略があることを知った。また、街中では家を持たず小さな商売で生計を立てる人々や、非公式経済の活躍が都市の活力を支えている現実に驚いた。文化や宗教も生活の一部として根付いており、仏教の参拝や自然との共生が、人々の働き方や考え方に影響していると感じた。こうした現場の観察

から、経済発展は単に数字の成長ではなく、人々の生活や社会のあり方を変える力を持つことを学んだ。経済学部学生として、理論だけでは見えない社会の複雑さや、文化・産業・制度のつながりを理解する大切さを改めて実感できた研修であった。

【全体感想】

私は、自分自身の成長や機会点についてとてもよく知ることができました。私にとって今回の「国際研修スリランカ」は、二回目の海外研修でありました。去年は、先輩頼りという形から抜け出せずにいたため、主体的に動くことができませんでした。しかし、今回はスリランカの学生の目を見て、プレゼンテーションを行えたことや、ゼミナール全体の流れを自ら把握する姿勢をとれたこと、現地の人に対して積極的に質問ができたことなど、去年と比べ、成長を感じることもできました。一つ後悔があるとするならば、「遠慮」という点です。もう少し主体的に動けることを強みとしている自分にとって、遠慮はとても後悔しております。もう少し学生と話すことができた、もう少し仲間とのコミュニケーションをとれたなどがあります。次回このような機会があった際には、遠慮の姿勢を少しでもなくし、実生活にも生かしていきたいと感じる研修でした。